ヤスクニ通信　No.262　2022 年 1 月 21 日
発行　靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い（略称「つどい」）　代表・星出卓也（Tel/Fax042-458-0251）
事務局　西東京市柳沢 2-11-13 西武柳沢キリスト教会気付　HP　https://yasukuninotsudoi.christian.jp/
例会　毎月第3金曜　7:00～9:00pm（休日の時第 4 金）　会場　NCC フリースペース（新宿区西早稲田 2-3-18 日本キリスト教会館 24 号）

ヤスクニ・レポ　262
国家と犠牲について

月村　順一（船橋聖書バプテスト教会）

高橋哲也著の「国家と犠牲」を読みながら考えたことを述べます。まず、国家にはその国を維持していくうえで対外的な脅威にさらされ、維持していくうえで祖国を防衛し、また参戦する事で、国民兵士に戦って死ぬこと要求するものであり、それなしでは保全していくことが現状では非常に困難なものであるという事実です。その戦争が純粋に侵略者からの防衛戦争、あるいは自ら引き起こす侵略戦争であっても国家の側は祖国の為に英雄的な貢献をなした神聖な礎であると定義されてきた。この例はひとり日本だけにみられる特質ではありません。洋の東西を問わず、古代より現在まで行われている事柄ということです。

【犠牲という語の起源】交通事故の「犠牲者」には被害者を意味していて特別な生贄（いけにえ）という意味ではありませんが元々「犠牲」には生贄の意味があった。犠の文字には古代中国で神へ奉げる羊の意味であった。「犠羊」牛の犠牲は「犠牛」と言っていた。創始は主なる神へ奉げることが始まりであろうが古代中国でも同じように神に生贄をささげることが行われた。

ヨハン・ゴットリープ・フィヒテ（独人）とエルンスト・ルナン（仏人）、の対比

フィヒテが行った講演『ドイツ国民に告ぐ』はナポレオンのフランス軍によってドイツが征服された時に、祖国の解放を呼びかけるためにベルリン・アカデミーで行った連続講演。当時ドイツは領邦国家で分かれていたが仏軍に敗れた。プロイセンでフィヒテは決して武器をとって立ち上がれとは煽らず、精神的な抵抗を呼びかけた。国家よりドイツ語を話すものがドイツ人であることを決めるとする。血族とその話す言語（Sprache）を重要視する。南欧に入ったゲルマン民族はローマに影響受けてラテン語系の言語、スペイン語、イタリア語、フランス語である。ただ独語だけはゲルマン民族の「根源的な言語」であって、生命に満ちた、生き生きとした、永遠の生命をそこに宿す言語であるという彼特有の国家観、神観、観念論である。そのような言語を話す限りで、ドイツ民族は、永遠の生命によって生かされたそういう自由な民族である、と告げた。また、ドイツのプロテスタントがなぜ最後まで戦えたかというと死ぬことは永遠の命を得ることだからだという。ここでは殉教と戦争による犠牲死が同一視されている。更に、ドイツ語を話す者はドイツ民族、種族、血の連続、血族の考えになり、領邦国家の絆を深めることはできても、オーストリアでもバイエルンでも、中世のドイツ騎士団時代に東ヨーロッパへ移住した人々もドイツ語を話し続けている、ならばドイツ人だということになり、結局は血統主義的な国家概念が大ドイツ主義になり、ヒトラーの第三帝国まで正当化することになると著者は指摘する。

その約 70 年を経て、1882 年 3 月 11 日ルナンがパリ、ソルボンヌ大学で『国民とは何か』という講演を行なった。フランス革命後のフランス共和国は欧州世界における最初の近代国民国家であったと考えられ、その共和国を反革命の周辺諸国の攻撃から防衛する為に初の国民軍が創設された。１８７０年普仏戦争で、フランスはプロイセンに敗れて翌年ドイツ帝国が成立するがアルザス・ロレーヌの二州がドイツ帝国に奪われた。その敗戦の衝撃もあり対独復讐論も強かった一方、フランス国民を如何に立て直すかが問われた。ルナンの「国民」概念の定義としては・・・個人の存在が生命の絶えざる過程であると同じく、毎日「私はフランス国民ですと告白し、意思表示（国民投票）している」と説明する。また、「国民は種族ではない。」（ゲルマン民族としてのフランク族だけでなくノルマン人、バスク民族などいろいろな民族に構成されている仏国）とその考え方を否定した。言い換えればフィヒテは血統主義であり、ルナンは属地主義であるのだと言う。その属地主義の考え方の方が民主的に思えるが、そのルナンは次のようにも述べる。人間というものは、一朝一夕に出来上がるものではない。国民も個人と同様、努力、犠牲、献身からなる長い過去の結果です。祖国の為に、国民を創造し、維持するため

に支払われた犠牲に対する哀悼の感情が尊いのだ、と。ここでも犠牲の考え方が出てきました。

デリダと絶対的犠牲

ジャックデリダは「死を与える」で聖書創世記のアブラハムによるイサク奉献の記述とキルゲゴールの『おそれとおののき』を参照しつつ独自の「犠牲論」を高橋によれば展開しています。そこで私たちはもはや、「誰がアブラハムよ。と呼ばれるかわからない」と言う。デリダはこうしたキルゲゴールの解釈に賛同し、「私たちの責任と、あらゆる瞬間に死を与えることに対する私たちの関係との逆説的な真理」という。神の呼びかけに聴き従うアブラハムの振る舞いは他者（ここでは神）の呼びかけに応答して責任を果たそうとする者が一瞬たりとも逃れることができない「絶対的犠牲」の構造が示されているという。すなわちある他者（神）に対して忠実であろうとすると、別の他者（イサク）を犠牲にしなければならない。「わたしは他の他者を、他の他者たちを犠牲にすることなしには、ある他者の呼びかけ、要求、責務、それどころか愛に対してさえ、応えることができない。」これこそが絶対的犠牲の構造であり、これはキルゲゴールの言う「信仰の騎士」だけが直面する例外的な事態ではない、とデリダは指摘します。法的政治的決定は元より、あらゆる倫理的決定にとって免れることのできない構造であり、「あらゆる男女があらゆる瞬間に直面する責任をそのパラドクスにおいて」表現するものだという。

私たちの日常が、教会奉仕なのかそれとも伴侶や家族を労わることなのか、子どもを愛する事なのか、悩む兄弟姉妹を助けることなのか、国家の問題なのか、教会内の問題なのか。どちらを取ってもどちらかに批判され追及され、告発される対象になり得えます。この構造の中で法の支配、市場経済、対外債務その仕組みの故に同じ社会の数億人もの子供たちを飢餓や病気で死なせている。－自己自身を犠牲にしないための他者の犠牲が恒常的に行われていると指摘するのです。しかし、著者はこう結論を述べます。魯迅はかって「狂人日誌」のなかで、人間が人間を食って生きている社会の戦慄を書いた。しかし、人間が人間を食う社会に絶望しつつ、希望への問いを最後に発していると「人間を食べたことのない子供がまだいるかもしれない。子供を救え！」

私たち自身のなかに、「人間を食べない子供」への希望を目覚めさせること、犠牲の論理への批判はそこにあると言うのです。

私たちキリスト者は更に、この「犠牲」を完全に成し遂げた神の一人子イエス・キリストによって贖われています。新たな国家への犠牲も追悼も必要はなくなりました。このことの実現を目指して共に励みましょう。

２０２１年１２月１７日例会奨励「祭壇から出て来て」
ヨハネの黙示録１４章１８節　星出卓也牧師（日本長老教会西武柳沢キリスト教会）

18 節に登場するもうひとりの御使いの特徴は、彼が「祭壇から出てくる」というところにあります。祭壇とは、祈りの香が炊かれる場所です。黙示録の 8 章 3-5 節にて「**別の御使いが来て、金の香炉を持って祭壇のそばに立った。すると、たくさんの香が彼に与えられた。すべての聖徒たちの祈りに添えて、御座の前にある金の祭壇の上でささげるためであった。香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。**」とある通り、主の聖徒たちが地上でささげる祈りは、目に見えない祭壇を通して神の御前に香しい香となって立ち上っているのです。特に黙示録 8 章が描いているのは、主の聖徒たちが地上のあらゆる不信仰、そこから引き起こされる不正と邪悪の数々に心を痛め、また自らが受ける主の御名による迫害と苦しみについて、彼らが祈った祈りがついに満ち溢れて、神がその祈りを聞かれる事によって地上に様々な裁きが起こされると語っています。

祈れば、祈ったとおりに即座にかなえられることばかりではありません。むしろ祈れども主の聖徒たちの苦しみが取り去られないままということも多くあります。それは主の聖徒たちの祈りが聞かれないということではありません。主は全ての祈りを受け止められ、神の時が満ちた時に、速やかにその答えはこの地上においても与えられるのです。黙示録 6 章 9-11 節参照。

「**火をつかさどる権威を持つ別の御使い**」の祭壇で焼かれる火、つまり聖徒たちの祈りは神の御前に届けられて、裁きの始まりの合図は、この御使いの呼び声から始まる。つまり積まれた祈りは、決して無駄に地に落ちることなく、その裁きを行われるその時まで、主の御前に蓄えられているのです。そして祈りが主の定められた時に、祈りの見事な結末が、この地上に実現されてゆく事になるのです。